【ねがいましては】

平成２６年１２月２２日　　*KYOWA SCHOOL*
第２９０号

「森の番人」

ハリーポッター原作者のＪ・Ｋ・ローリングさんと、日本語版翻訳者の松岡佑子さんが、登場人物の中で一番好きな人は、森の番人で大男のルビウス・ハグリットだそうです。ローリングさんの言うハグリット像とは、「彼は心が大きく優しく、うそをつけず不器用な人」なのだそうです。

そこから感じられるひとつのことば・・・「安心感」です。

子どもたちは、日々、様々な初めての経験をしています。今まで知らなかったことや、勝手な思い込みになっていたことが、実際には全く違っていたこと。その事実に出会ったとき、心には大きなショックが残ります。

例えば私の恥かしい経験、小学校低学年当時、アジの開きがよく食卓に出ます。その姿は目が並んでおり、カレイやヒラメのように広がっています。私はアジの開きも、その姿のままで海の中で泳いでいるものと思っていました。

例えばおまわりさんは悪い人を捕まえてくれる良い人、というイメージが強くありました。だからきっとお金を盗まれた人に、盗まれた分のお金を渡してくれる人に違いないとか。

きっと今を生きる子どもたちも、結構いろいろな勘違いをしていると思うのです。その勘違いがわかった時のちょっぴり恥ずかしい気持ちを、そのまま黙って聞いてくれそうな人物像が想像できます。

心が大きい・・・なんでもどんなことでも、「うん、うん、そうだったのか。それで・・・。」と、真剣に話を聞いてくれる存在。

優しい・・・「あれ、ちょっとばかり元気がないようだね。おじさんと遊ぼうか。」

うそがつけない・・・うそをつこうにもうそをつけるような材料が生活の中に存在しない。つまり欲が全く人柄に現れない。

不器用な人・・・手先はすこしばかり器用でも、最後の最後でどうしてもうまくいかずに失敗ばかり。見ていられない、知らずのうちに手を差し伸べたくなってしまう。

さて、子どもたちに、「この森の番人に一番なってほしい人は誰ですか。」という質問をしたら、一番に返ってくるのが「おとうさん」ではないでしょうか。

大男にはなれなくても、心の大きな人には変身できるかもしれません。時折、子どもに向かって「ニコッ」と笑顔を振りかけることもできるかもしれません。ついその気がないのに「プッ」とおならをしてしまったときでも、「ごめん、今のはお父さんです。」と、正直に白状する。「よしっ、お父さんに任せなさい。」と言いながら、日曜大工に汗をかきながら作った棚が、その日のうちに壊れてしまう。

こんな光景が普段当たり前のように見られたとしたら、子どもたちの心に宿る一つの想い・・・「安心」

そんなお父さん像から想像すること・・・きっと会社でも結構失敗やっているんだろうな。そんな時、大きな声で「ごめんなさい」って言っていると思うし。時々、同僚の女子社員さんが忙しそうにしていると、お茶なんかそっと出しているのかもしれないし。お父さんがいるから、会社の中はいつも明るいムードなんだろうな。

そんな父親像を学校へもっていきます。「先生が、ハグリットおじさんみたいだったらいいのになあ。」なんて思っている子は多いのではないでしょうか。

教育の現場では、成績、成績と、どうしても成績が先走ってしまいがちです。それを後押ししているのが、教育ご熱心なお母様方、お父様方。結構先生方も、保護者の方々からの成績熱に背中を押されているのではと思います。

国でも都道府県別のランク付けがされるテストを実施しています。いつのまにか、ハグリット像を連想させるような雰囲気は払しょくされ、ぎすぎすとすさんだムードが広がっていきます。そのムードと同じムードが、家庭内でも漂いはじめたら・・・。ご想像ください。子どもたちの心はどんどんと谷底へ落ちていきます。「わたしの安心できる場所はどこなの」「ぼくがぐっすりと寝ることのできるところはどこなの」・・・聞こえてきそうです。

このところ数年は、年間の自殺者数が減少傾向にあるといいます。しかしその中にあって、増加傾向にある年代があります。２０代だそうです。彼らは、大人たちの引いたレールの上を文句も言わず、黙って真面目に歩いてきました。

そんな青年たちが社会現実に直面して味わうもの「そんなはずじゃなかった」「なんなの、この現実は」・・・。

会社に一人でもハグリットおじさんのような方がいれば・・・。学校に一人でもハグリットおじさんみたいな先生がいたら・・・。どんなに苦しくても、その想いを黙って聞いてくれる人がいる。どんなにつらくても、いつ行ってもニコッと出迎えてくれる。そんな安心できる場所があれば、きっと彼らは追いつめられることなどないかもしれません。

そんな安心感を受け取ることのできる大切な場所・・・家族。そして学校です。

どうしても避けられない現実。資本主義社会の中にある当たり前なもの・・・競争。その競争に勝ってこそ、会社は存在を続ける、良い製品も作られる。でも、けっして忘れてはならないものを、子ども時代に心の奥底に土台として築かねばならないと思います。いつでもあそこへ行けば出会える。ハグリットおじさんに出会える。

「ここはあんたたちの本当の家じゃ」と、子どもたちに言ってあげたいのです。ありがとね。